

幻想科学ティータム

'Phantaphysics Grils' talk.



一 秋の夜長の不思議な縁^{みすてりいさーくる}
二 華胥^{かしよ}の国にて夢に餓^うえ

16 1

◆表紙アイコン：『こんなんでもいいんすか』金銀様
(<http://kinginsan.blog60.fc2.com/>)

▼ 秋の夜長の不思議な縁

障子の向こうは寒風吹く十一月。いつもは一人でその広さを
持て余していた私の部屋に、いまは他に二人の姿がある。

彼女たちが我が家に顔を出すようになってはや三か月。いま
や三人が机を囲むこの風景は、すっかり慣れ親しんだ日常とな
りつつあった。

「ねえメリー、蜜柑貰っていいかしら？」

「んー……？」

「はい、どうぞ」

「あ。さんきゅ、阿求ちゃん」

黒髪の彼女は宇佐見蓮子。やや切れ長の眼をした、凛々しい
印象のある美人だ。

感情をよく現し、くるくると表情を変える一方で、興味のあ
ることを前にすると驚くほど真剣な顔も見せる。そんな時の不
敵な笑顔はなかなか様になっているかと思うが、いまは黄色く
なった指でいそいそと三つ目の蜜柑を剥いているところ。

「ZZZ……」

もう一人はと言えば、私の右隣で炬燵の天板に頬を寄せ、幸
せそうな顔で猫よろしく丸くなっていた。

こちらではあまり見ない、綺麗な金髪の彼女がマエリベリ
ー・ハーン。初めて自己紹介された時には呼び辛い名だと思っ
たが、蓮子さん曰くメリーでいいわよとのこと。本人もその愛
称で呼ばれ慣れているようなので、私もそれに倣うことにした。
のほんととした気配と同時に、どこか触れがたい気配も感じ
させる彼女、猫は猫でも、気紛れで毛並みの良いシヤム猫か何
かが近いだろうか。

秘封倶楽部と名乗る彼女達二人は、聞けば『外の世界』の学
生であり、趣味としてオカルトを研究しているという集まりな
のだという。

……こちらで学舎と言えば精々が寺子屋程度で、彼女たちの
年齢なら学問をもつて身を立てている者を除けばとつくに卒業
していてもおかしくない筈なのだが、幻想郷と外とは少々事
情が違うらしい。

オカルトというのは、胡散臭く信用のおけない物事であり、
つまるところ魔法の森近くの古道具屋の店主が常々主張してい
るような与太話のことだろう。二人はそうした話を探してはあ
ちらこちらと出掛け、お茶をしたりお酒を飲んだりするという、
至極少女らしい会合を開いているのだとか。

そしていまはその会場に幻想郷が選ばれているというわけだ。
要するに、彼女達は与太話を肴に集まる根っからの暇人であ
る。

……だからこうして、私がお茶のついでに付き合っただけあげるというのも悪いことではないのだろう。うん。

「はー。……極楽極楽……。蜜柑は炬燵に限るわー」

年寄り臭い独り言とともに蜜柑を食べ終えて、蓮子さんはぽたんと身体を伏せ、顎を炬燵の上に載せる。

なにやら感慨深げなその様子につられて、私も蜜柑を一つ手に取った。皮を剥いて口に含めば、冷たい舌触りと甘酸っぱい果汁が口の中に広がり、喉を潤してゆく。

季節を感じる方法は数々あれど、冬の醍醐味の一つといえは確かにこれなのだろう。

「でも、こっちは冬が早いからねえ」

「そうですか？ 例年こんな感じですよ。確かに炬燵は色々手放せませんが……表を出歩いているときはともかく、机に向かい続けだと冷え症が大敵ですからね」

まだ昼過ぎだというのに、障子を揺らす風は身を切るほどに冷たく、これでは炬燵に潜り込んで動く気もなくなるともいうものだった。

以前は暖房に火鉢を使っていたのだが、なにぶん無駄に広い部屋、傍にひとつふたつ炭火があった所でなかなか暖は取れないものである。一度股火鉢をしている所をヤエさんに見つかってお小言を頂戴して以来、他の方法を考えるべくあれこれ思案して、導入を決めたのがこの炬燵であった。

もともと、この炬燵というものの、一回入ってしまうとなかなか出られないという難点もある。一昨年だけに永遠亭でも似たような経緯で炬燵を用意したところ、月の姫様がひと冬そこから離れなくなってしまったという話を耳にした。

……しかしその結果、その冬は竹林での小火騒ぎがびたりとおさまっていたため、里の人たちからは歓迎されたというオチまで付いたのだけだ。

快適さはかくも人を変えるのである。

「んー……」

もももどと寝返りを打ち、メリーさんがうつすらと目を開けた。炬燵布団に肩までくるまった彼女は、心底幸せそうな笑顔でふわあど大きく欠伸をして、

「ねえ蓮子……私、こたつと結婚する……」

「夏にエアコンとしてなかったわけ？」

「……じゃあ愛人でもいい」

「はいはい。それも言ってたから」

聞くところによれば、蓮子さんたちの身の回りには、炬燵というものが無いらしい。ストーブよりもさらに進歩した、ボタンひとつで温度を快適に保つような仕組みが街の至る所に仕掛けられているのだとか。そのためよほど遠出をしない限り、冬に表を出歩いても寒さに震えることはないという。なんとも壮大で贅沢な無駄遣いだ。

あるいはこの抗いがたい炬燵の魔力によって、人が墮落しないようにと叡智を尽くしているのかもしれない。

そんな訳でこちらの寒さは二人には少々酷なものであるらしい。特にメリーさんの方はかなり寒さに弱いようで、ここしばらくはずっとこんな調子だった。

「あーあ、これじゃ動物ねえ。冬眠してるみたい」

「まったくですね」

苦笑とともに相槌を打つ。

実際のところそんなに的外れな評価でもない気もした。なんでも彼女の眼は特別製で、結界の裂け目を見つけることができるのだとか。

幻想郷は博麗の大結界と妖怪達が作った結界によって外界と隔てられているわけで、確かにその能力をもつてすれば、こちらとの行き来も容易いことだろう。

外来の人間となると、今ではすっかりこちらの一員となった山の上の神社の巫女などがそうなのだが——神徳をもってこちらへの道を拓いた守矢の神社の面々とは違い、彼女たちはその眼によって自分の身一つでこちらへと渡ってくる事が可能なのだそうだ。

……一説によれば、伝言を残しながら遠方から少しずつ近づいてくるという彼女とおなじ名前の妖怪がいるそうだから、案外彼女も妖怪なのかもしれない。そうなれば稀人などとして、

幻想郷縁起にも載せておく必要があるだろうか。

再び夢の中へと落ちて行ったメリーさんを見ながらそんな事を考えていると、蓮子さんがちょうど机の端へと手を伸ばしたところだった。

「これ、例の改訂版？」

「ええ」

付箋をつけたままの幻想郷縁起改版の原稿を手に、蓮子さんがばらばらと頁をめくる。

私と彼女達を結びつけたのも、この本だった。

私が長年の疑問と共に載せた、竹林でのメモを手掛かりに、彼女たちは私の元を訪ねてきたのだ。

幻想郷が結界で外部と隔離されているとは言え、外界から道具が流れ着いたり、神隠しにあった人間が無縁塚で見つかることはそれなりにある話だ。しかし、外の世界からの来訪者に名指して呼ばれたのは、長い稗田の歴史の中でも類を見ないことであつた。

数百年の時間を経てきたはずのあの紙片が本当に彼女の手によるものなのか、まだ幾許かの疑問が残っているが——ともあれ、人の縁とはかくも数奇なものである。

「一度は完成させたつもりだったんですが、後から見返すといろいろと間違いやら誤字やらが大量にできてまして。前の版も人気がありますし、しばらくは大々的に再販と言うことはない

と思いますが」

「あー、あるある。私も良くレポートとかでやるわ。徹夜で書き上げたラブレターなんかも、翌日にもう一度冷めた目で読めとか言うわよね」

「……その喻えが合ってるのかどうかは知りませんが。それにここ最近、またいろいろと騒動もありましてね。本当に騒ぎには事欠かないですよ」

……ついにて迷惑までもあれこれ被っているというのが本音である。

稗田の家は人里の代表のような側面もあり、阿礼乙女という立場から妖怪やら魔法使い達との折衝に当たることもしばしばだ。最近では週に何度も出かける予定が入ったりして、なかなか原稿も進まない。

「昔は縁起をまとめて、転生の用意をしていれば後はなにもしなくてもいいくらいで、楽なものだったんですけどね」

はあと吐息をこぼし、同じく炬燵の上に突っ伏す。

まあまあ、と苦笑しつつ応じてくれる蓮子さんに、少しだけ甘えてみる。

彼女たちと出会っての一番の収穫は、退屈な冬の日にくうして話し相手がいるのが決して悪くないのだということを知ったことだろう。

「……おや？」

ふと耳を澄ませば、ばたばたと早足の足音が聞こえる。それもうやら、こちらに近づいてくる気配。

うちの使用人たちのなかで、あんなに騒々しくする者に覚えはない。とすればよほどの不作法者か、あるいは逼迫した事情があるということだ。どうにも不穏な気配を感じ顔をあげる。

そうしている間にも足音は部屋のすぐ前までやってきて、

「阿求ちゃん、いるっ?！」

声とともに襖を引き開け、姿を見せたのは見知った顔。私の古馴染で、里の花屋を営む少女——冴月麟であった。

「……うー……寒い……」

「メリー、よだれよだれ」

開け放たれた障子の隙間から吹き込む寒風に、メリーさんはむずがるように炬燵の中へもぐりこもうとする。眼を擦る彼女の頬が汚れているのを見て、蓮子さんが苦笑しつつハンカチで口元をぬぐってやっていった。

「どうしました？」

街中では良く顔を合わせる麟だが、彼女の方から訪ねてくるということはない。しかし麟は随分慌てた様子で、挨拶もなしに部屋へと入ってくなり、がっしと私の手を掴み——

「ひゃ!？」

いきなりこちらの手首を掴んだ麟の手が、氷のように冷たくなっている、私は思わず悲鳴を上げてしまった。

「い、ごめんっ阿求ちゃんっ」

とは言え、突然手を振りはらわれ、麟も驚いたのは同じだったろう。しゅんとなる彼女に私はかるく手をさすりつつ、

「……いえ、平気です。それよりそんなに急いて、一体何事ですか？」

「あ……そ、そう、大変なのよ阿求ちゃんっ!!」

ぶんぶん握った手を上下に振り回して——麟は言った。

「すぐに来て!! 畑が荒らされてるの!!」



慌てる麟にひとまずお茶を用意して落ち着かせ、手短に話を聞いたところによると。

今朝——といつてももう昼に近い時間になるわけだが、里の畑の一つが荒らされているのを、野良仕事に出た村人たちが見つけたのだという。

「ああ、あの小麦の。それは不届き者もいたことですね。……しかし、それくらいのことですこまで慌てなくても」

「そうなんだけど、違うの!! あ、うん、そうじゃなくて、荒らされてたのはそうなんだけど、普通じゃないのよ!! うまく

説明できないけど、変なふうに芽が倒れたり枯れたりしてて……柵も壊れてないし、足跡もないのに、あちこちでこんなふうだね？」

「ふーむ？」

身振り手振りを交えての熱弁だが、いまいち要領を得ない麟の説明に、腕組みを一つ。

要するに、獣や霜、風といった自然災害では、明らかに起こり得ないようなことが起きている、ということらしい。それがあまりに不可解なので、現場で混乱が起きているのだろう。

「それで阿求ちゃんにも来てもらえないかって——焦っちゃって……」

「だからあんなに血相変えてきたのね」

「うー。……お見苦しい所をお見せしました……」

蓮子さんの言葉に恥じ入るように俯く麟。普段はあんなに取乱すような娘ではないのだけど、よほど焦っていたのだろう。「しかし、そんなに妙だと言うなら私のところよりも先に行くべきところがあるような気がします」

「だって、巫女さんこの前から旅行中じゃない」

「……………あー……」

今更ながらに失念していたことに、思わずしかめっ面をしてしまふ。自分でも不思議に思うが、物覚えの良さと度忘れは別物であるようだ。

「巫女って、博麗神社の？」

「ええまあ、他にも神社やら寺やら色々ありますのでそつちでもいいんですが……」

基本的に、異変となればその解決は巫女の役目だ。畑が荒らされていたというのがどこまで異変になりうるのかは置いておくとして、頼っていけない筈がない。麟の口ぶりからすると、村人たちの間に混乱が起きているのは確かなのだから。

しかし、生憎と今はそうもいかない理由があった。

「先週から秋休暇とかで、こぞって地底に慰安旅行中なんですよ。新嘗祭も無事済んだからだそうで」

これは巫女一行に同行した魔法使いから聞いた話だった。温泉だ宴会だと、どちらかというと報告というよりは自慢に來た氣配であったが。

確か來週まで戻らずに遊び倒すとか言っていた氣がするので、少なくともそれまでは神社に巫女は不在になる。

「肝心な時にいないんですから。まったく困ったものです。：今から呼び戻すにしても、地底の事は不案内ですしね」

地上から放逐された妖怪達が住む場所であるということは聞いているが、私もまだ訪れたことがない所だ。そのうち実地検分も兼ねて向かおうと思っていたが、先延ばしにしていたのいろいろと裏目に出たことになる。

妖怪たちなら連絡方法くらい知っているかもしれないが、そ

もそもその妖怪たちに接触するのがまたひと手間である。

「分かりました、すぐに支度をしましょう。どこまで力になれるか分かりませんが」

「ありがとう、阿求ちゃんっ」

麟は顔を明るくするとこちらの手を取ってぶんぶん振る。なんとなく氣恥ずかしくて目をそらしていると、そこで不敵な笑いが割り込んできた。

「ふふふ、阿求ちゃん、どなたかお忘れじやありませんか？」

芝居がかった仕草で帽子のつばを押さえ、立ち上がったのは蓮子さん。いつの間にか外套に着替え、すっかり出かける支度を終えている。

「水臭いなあ。不可思議不思議オカルトと聞いて、われらが秘封倶楽部が黙ってられるもんですか。私達も手伝うわよ！ ねえメリー？」

「えー……？ やめましようよ。寒いし」

「ああもうっ、人が折角ノってるのにっ」

いまだ炬燵の中で眠そうな顔のメリーさんの柔らかそうな頬をひっぱりつつ、蓮子さんはふと表情を元に戻した。

「ま、ぶっちゃけ大したことできないかもしれないけど、手数はあつたほうがいいんじゃない？」

「そうですね」

ウインクとともに告げられたのは、至極もつともな意見でも

あつたので、私達はそろって屋敷を後にすることとした。

「やだー。寒いー……」

「あーもうメリー、しゃっきりしなさいってばっ」

……若干の、抵抗があつたことを付け加えておく。



被害があつたというのは里からもほど近い耕地だつた。

この区画はもと細々と豆などを作っていたのだが、一昨年の間欠泉を伴う怨霊騒動以来、河童と山の神様主導ではじまつた温泉開発の一環として、地熱を利用した冬小麦の栽培を試験的に行っている。

この、冬に麦を育てるという話。最初は突拍子もないものと一笑に伏されたが、導入を目指す者たちの粘り強い説得と実証によつて徐々に支持者を増やし、ついには里一番の石頭と評判の大地主さんまでも説得して実現したという経緯がある。

それゆえ里の興味も引いていたのだろう。現場には既に人だかりができており、おっかなびつくり半分、好奇心半分の見物人たちが畑の周りに詰めかけていた。

「みんな、連れてきましたよー」

「おお。稗田様っ」

すっかり困つた様子の農夫たちが取り囲んでくる。御阿礼の子として注視を浴びることは慣れたものだが、面と向かつて頼られるとなると少々こそばゆい。

「とにかく現場を見せていただけますか？」

「へえ、こちらです」

皆に先導されつつ、私達は畑の見える場所まで進む。

そこにあつた光景は、私の想像を大きく超えるものだった。

「わー……」

「これはまた……見事なもので」

今月の頭に作付けも無事終わり、十日ほど前に様子を見に行つた時にはまるで芝生のように、青々と麦の芽が伸びていたのだが――

いまやその一面の緑にはいくつもの瑕疵ができていた。毛足の長い緑の絨毯を、巨人が無残に踏みつぶしたかのように。生え育つ最中の麦の芽が、直径数メートルにわたって円を描いたように枯れている。

それも一か所ではない。大きさに差こそあつたが、枯死した麦の範囲は見えるだけでも十か所近くにも及んでいる。枯れた麦の白い円弧はいくつも連なり、重なり、まるで子供がけんけんぱを遊んだかのように、麦畑の中を横切っている。

荒らされた麦芽は四方八方に乱れて倒れ、背の高い麦芽まで

無残に踏みだかれていた。

「うーん。思ってたより凄いわね、これは」

背伸びをしつつ遠くを見回す蓮子さん。

隣のメリーさんというと、防寒着で着ぶくれをしたまま、うつらうつらと舟を漕ぎつつ、寒そうに身体を丸めていた。

「……どうかしら。何か分かるの？」

「あ。これは失礼しました」

横からかかった声に振り向けば、鮮やかな秋の色を纏う姿が二つ。慌てて頭を下げ、不敬を詫げる。

秋の神様姉妹は、大層慌てている様子だった。

「いらしたんですか。てっきりもうお休みなのかと」

「こんな時に休んでなんかいられるもんですかっ！」

「……阿求ちゃん、知り合い？」

「ああ、そう言えば蓮子さん達は初めてでしたね。こちらは秋静葉様に秋穰子様。お二方とも秋の神様ですよ」

「……こんにちわ」

「はじめまして。よろしくね」

「……フランクな神様ねえ」

いきなり握手を求められ、蓮子さんもやや驚きながら自己紹介をする。外の世界ではあまり神様が歩いているのは一般的ではないらしいが、まあそれを差し引いても、仮にも神様が野良作業着姿で、村人たちに混じっているとは思わないだろう。

泥に汚れての畑仕事をやたらと似合っただけに見えるのは彼女たちが秋の神様だからなのか、神徳ゆえなのか、他の理由なのかは——敢えて言うまい。

「穰子様は秋の収穫と豊饒を、静葉様は紅葉や落ち葉など、秋の静けさを司っておられます」

「へー。なんか凄そうね。じゃあ幻想郷だとこの二人が居ないと秋が来ないんだ？」

「いえ、そういうわけでも無いらしいですね。そういう意味では居ても居なくてもあまり変わりません。例年収穫祭が近くなつてから思い出したように招待状が用意されるくらいです」

「ちよい待てこら」

「そうよ、穰子ちゃんだって後ろめたいの我慢して頑張ってるのよ！ 私も毎日、一枚一枚葉っぱ千切って撒くの大変なんだから！」

「あれ手作業なの!？」

その労苦があるからこそ、秋の風景はどこか物悲しさに彩られていたのかなんとか。

……与太話はさておき、秋の象徴であるお二人は、里の中でもっとも身近な神様だ。出番のない秋以外でも積極的に信仰を集めようと、率先して地域密着型の活動をしているという。見れば、畑の隅には小さな祠が建てられている。道祖神などと集合はされているが、立派に彼女たちへ信仰の証だった

「……もうなにがなんだかさっぱりなのよ。私も、お姉ちゃんもこんな見たことないから、何か悪いことでもあるんじゃないかって気が気じゃなくて……。だって、今朝、様子を見に来たらいきなりこれでしょ？」

先程も少し触れたが、そもそも、この冬小麦の栽培を発案したのは何を隠そう穰子様である。その準備のために東奔西走してようやく実現に漕ぎ付けた矢先にこんなことが起き、穰子様はすっかり困惑している様子だった。

おろおろと畑と私の顔を見比べては訳が分からないというようにかぶりを振って、麦畑に捺された巨大な円印を示し、肩を落とす穰子様。その背中をそっと叩きながら、静葉様が言葉を続いだ。

「獣が荒らしたようにも見えないし。風にしても妙な倒れ方してるし……それに、もしそうだったら、私か穰子ちゃんか気付くと思うわ」

「確かに足跡……のように見えなくてもいいですが、こんな大きな足の生えた生き物が暴れていけば流石に誰かしらの目には止まるでしょうね」

「ううう……そうよ、どうせ私なんか、満足に畑も守れない案山子以下なのよう……鴉天狗にも馬鹿にされて、写真も撮ったそばから捨てられそうになるくらいだし……」

「そ、そんな事ないわよ、穰子ちゃんっ！」

放っておくとそのうち厄神にでもなりそうな気配の二人がや気にはなつたが、とりあえず脇に置いておくことにして、私は村人たちに向き直った。

「まあ、これが何かはひとまず後回しにします。先に状況を確認しましょう。……今朝まで誰も気付かなかったんですか？」

ざわざわと問い交わす村人たち。

程なくして、最後に畑で作業したのは一昨日の午後であるということが分かった。

「一昨日ですか。昨日は？」

「私が見回ってたの。天気も悪くなかったし、ざつと柵のほうだけ。このへんは見えてなかったけど——」

後悔を滲ませ、口をつぐむ穰子様。

「ああ……なんで確認しなかったの私の馬鹿……。ああ、もうなにもかも嫌……。鬱だ死のう……」

「落ち着いて穰子ちゃんっ!？」

「……ねえ、この子達いつもこんな感じなの？」

「大体は」

もともと季節をつかさどる神様ゆえ、秋以外は大概こんな感じではある。

親しまれている割に、一部を除けばいまいち知名度のないお二人だ。例年、収穫祭に呼ばれる度にバツの悪い思いをしていただだけに、今回の件は応えたのだろう。

しかし、神様に頼られるのは悪い気はしないが、神様の他力本願というのかもしれないだろうか。

「人為的なものと仮定してですが、一昨日の午後——大体お昼過ぎくらいから、今日の朝早くまで、この畑をはっきり確認してる人はいないわけですね」

「……ふむ。アリバイは絞り込めなさそうね」

「もう芝居でも啖呵売でもいいわよ……」

落ち込むお二人が見ていらなくなつたか、隣も不安げな顔をする。

「阿求ちゃん、どうかな？」

「ふむ。これだけですとなんとも言えませんが……」

これまで読んだ文献などを思い返し、記憶を巡らせてみるが、困ったことにこの状況に重なるようなものに覚えはなかった。

私が黙ってしまったことで、その場の一同にはつきりと落胆があらわれる。野次馬の中にもさざ波のように不安が広がり、辺りには重い沈黙が落ちる。

これは余り良くない予兆だ。さてどうしたものかと思案を巡らせていたところで、蓮子さんがひよいと手を挙げた。

「阿求ちゃん。いい？ 私ちよつと心当たりあるんだけど——」

「「本当!!」」

「うわあ!! ちよ、落ち着いてっ」

「これが落ち着いてられますか!!? なに? なんなの!!? と

つとと白状しなさいっ」

「わかった、わかったから離してっ、首、首締まるから!!」

言うなり秋の神様姉妹に縋りつかれ蓮子さんはそのままべしやんと押し倒されてしまった。二人に押し掛かれながら、蓮子さんは身体を起こしてお尻をさすりつつ、

「けほっ。……うー。あのね。これ、ミステリーサークルじゃない? メリー」

「あふ。そうねえ……」

「それは推理小説ばかり読んでいる集まりか何かですか?」

聞きなれない言葉に首をひねれば、蓮子さんは違う違うと手を振ってみせ、

「んーとねえ、私も昔の文献で読んだだけなんだけど。分かりやすく言えば、こんな風に稲とか麦の穂が規則正しく倒れたりしてできた円陣サークルのことよ。クロップサークルとも言うんだっけ? 海外だと特に有名で、UFOが降りた場所にできるとか、宇宙人の実験跡だとか、メッセージとか言われてたらしいわ。えつと……ほら、これ」

蓮子さんは胸のポケットからメモ帳を取り出し、頁をめくって示して見せた。そこには新聞の切り抜きと思いき古びた記事のスクラップがあり、私と一緒にって覗き込んだ穠子様が声を上げる。

「これよこれ!! みんな見て! そっくりじゃない!!」

切り抜きの写真には、広い麦畑と思しき場所のなかにいくつも重なる規則的な円と線が映っていた。確かに今、目の前にある光景と良く似ているようにも思える。

「宇宙人と未確認飛行物体……ですか」

困ったことにどちらにも心当たりがある。とくに後者は、つい最近里を騒がせた正体不明の飛行物体として有名だった。

野次馬の中にもそう思った者がいたようで、場はにわかに騒然とし始める。

「じゃあ、これはそいつらがやったっていうの!？」

「んー。それなんだけどさ」

蓮子さんはがりがりと後ろ頭を掻きつつ、次のページをめくる。そこには老年の男性を写した写真があった。

「ただね。これがそうだとしてよ? 一つ問題があるの。ミステリーサークルって、一時は数百、数千って見つかるくらい有名だったんだけど……後になってから、大半が捏造だったってのがわかったのよ。一番最初にこれを悪戯で作った人達がいて、それを真似した人がさらにたくさん模倣を広めたってわけ。一種の流行因子^{ミーム}よね」

つまり、ミステリーサークルの大半は、悪戯のような目的で作られたものだ、と蓮子さんは語る。

「だからこそ磨れて幻想になったとも解釈できるわ。その気になれば数人で、一晩もあれば作ることができるのよ。それこそ

もつと大掛かりなものでも簡単にね」

「成程。特別な能力がなくても、誰でもやろうと思えば可能ということですか。ややこしいですね」

つまり。外の世界において幻想になりつつも、ミステリーサークル自体は人為的なものでもある、という訳だ。

微妙に厄介な話だった。

「そうなんっちゃうわ。でも、誰かの悪戯だとしても動機がね。わざわざこんなことして注目浴びたがる目立ちたがり屋なんているのかしら?」

「なんとも答えにくいですね。……里の人間の中に、そうしたものがいるのかと聞かれれば、ほぼその線はないでしょう」

農耕はなによりも生活に根差したものだ。里で育てば、畑や作物を悪戯半分に扱うことは一番してはならないことだと最初に教わる。

私も昔、それなりに——恥ずかしながら自分の生まれをあれこれと鼻をかけていた時期があつて、ついうっかり畑の事を軽んじるような事を口にした折、慧音先生から激しい教育的指導を受けた覚えがある。

——寺子屋でのお仕置きの一発は、里の人間なら一度は食らったことがあるだろう。鱗をはじめ、村人たちも顔を見合わせ、同じことを考えたようだった。

「じゃあやつぱり、妖怪の仕業なのね!？」

「そう考えるのが自然……ではありますが。人を不安がせたり驚かせて腹を満たす妖怪ならそうした悪戯に手を染めるようなことはあるかもしれませんがね」

「とは言え確信はなく、私としてもいまいち箇切れの悪い応答をせざるを得ない」

「あー、別にそうだって証拠がある訳じゃないんだけど……」

「いいえ、妖怪に決まってるわこんなの。よし、そうと決まったら早速懲らしめに行つてやらなくちゃ!!」

蓮子さんも自信は持てていないようだった。しかし、既に穰子様は聞こえていないようで、立ち直った彼女を中心に、村人たちから声上がる。

「とりあえず未確認飛行^{UF}物体の方から当たりましよ! 今はえつと……命運寺^Uだっけ? あそこならすぐに行けるから——」

「……………」

なんとなくすつきりしないものを感じつつ、私が腕組みをしていると。

「んー。違うわよー?」

ふわあ、とまた大きな欠伸をしながら、皆の前に歩み出る姿があった。

「むにや。名探偵さん、残念だけどの推理も今回はペケね。まあ蓮子の予想が外れるなんていつものことなだけだ」

「なんだとー!?!」

「この犯人は、妖精よ」

微笑んで、メリーさんは大きく乱れた麦の根元から、何かを摘み上げる。

白い色をしたそれは——

「茸?」

「芝^{スコッチ・ボンネット}生茸^{フェアリーサークル}。これね、妖精の輪よ」

そう言つてメリーさんは麦の根元を示す。蓮子さんと共に覗き込んでみれば、枯れた麦芽の円弧に沿うように、白いキノコの傘がいくつも並んでいた。

「昔、お祖母ちゃんに教わったわ。秋になると、夜中の誰も見えない時間を見計らつて、妖精が輪になつて踊るの。そこにこうやつて茸が生えてくるのよ」

メリーさんの説明によれば、それを妖精の輪、あるいは魔女の輪とも呼ぶのだそうだ。その正体は、土壌の表面浅くに成長した菌糸——つまり茸の塊だという。

「一番大きく育った例だと、直径数キロなんて記録も残ってるわ。世界最大の生物ね。……確か、円状に育った菌糸の先端で茸が生えてるのよ。ほら、蓮子」

「え、私?」

「いつも私ばかり肉体労働させられてるんだから、今日くらいは代わつてくれてもいいんじゃないかしら? それとも、私と貴女の眼を取り替えてみる? 案外、似たような景色が見え

てるだけかもしれないけどね」

そう言って、メリーさんは手近にあったスコップを示した。笑顔の迫力に押されつつ、蓮子さんは渋々とそれを受け取り、枯れ麦の円の中に踏み入ってゆく。

「……このへん？」

「そうね」

頷いたメリーさんに応え、蓮子さんは枯れた麦芽の散る地面にスコップを突き立てた。スコップの刃がざくりと深く土を掬うと、枯れた麦の根に混じって、白い帯状の層がある。

それは確かに、白く絡み合った茸の糸の塊だった。

「ね？」

それを覗き込み、にこりと微笑むメリーさんに、周囲からおっとと歓声上がる。

遮るもののない、栄養の豊富な土壌に根を下ろした菌糸は、四方に——いや、正確に表現するならば、落下した地点を中心にして同心円状に成長してゆく。

茸の成長は麦などよりもはるかに早いと、地面の栄養を吸われた麦は枯れてしまう。そうして出来上がったのが、この丸く切り取られたような円弧なのだ、ということだった。

「たまに、茸が傘を作るときに逆に草木の成長を高める成分をつくることもあるの。だからこんなふうに変に麦が伸びてるとこもあるのよね」

荒れた麦の中、ひよろりと伸びた背の高い麦芽を摘まんで見るメリーさん。驚いたことに、その麦にはすでに若穂がついていた。

かくして茸の仕業により、今回のような不可思議な円が生じたのでしたと解説を終えて、メリーさんはもう一度小さく欠伸をした。

寝ぼけまなこの名推理に、なぜだか周から拍手も起こる。

……基本的に皆ノリがいいのはいつものことだ。

「でもこんな茸、見たことないわよ？」

そろって首を振る秋の神様姉妹。花屋として草木に広く通じる麟もそれに首肯する。私も生憎と知らない種類だった。

……もちろん専門家の三人に比べれば、茸にかけては素人目ではあるが。

「ふむ。とすると、外来の種類かもしれませんね。メリーさんのお祖母様がご存じであると言うなら舶来モノと考えるのが自然です。穰子様、静葉様もこの国にない茸のことまでは知らなくてもおかしくないですね」

ここまで来ると、犯人は自ずと絞り込める。人里にも顔を出し、茸を扱うと言ったら思い浮かぶのはたった一人だ。

……先日我が家を訪ねてきた白黒の魔法使いが、この近辺を通りかかったかどうか。その問いかけには、無論想像通りの答えが返ってきた。

案外、本当に妖精の悪戯ということもありうるが、それは後から考えればいいだろう。

「いずれにせよ、茸が要因であるというならこの土を除けてしまえばこれ以上は広がりませんか」

「よし、じゃあ早速やるわよ!! みんなも胞子が散らないように慎重にね!!」

腕まくりと共に、神様姉妹の号令に従って村人たちが氣勢を上げる。

「え、私も!？」

「手数は多い方がいんですよ」

なし崩しに、スコップを持っていた蓮子さんもそれに巻き込まれていた。

そうして作業の始まった畑の端、メリーさんはつまんだ茸の傘を見て、ウインクをひとつ。

「折角だから食べちゃいませうか? たしか芝生茸ってクッ

ギーに使うと美味しいのよ」

「本当ですか?」

私の問いかけに、メリーさんはのんびりと頷いた。



——後日。地底旅行から戻った森の魔法使いのポケットから、

芝生茸の胞子がみつき、事件はめでたく解決の運びとなった。

彼女曰くわざわざ遠方から取り寄せ、苦勞して交配させた種類であつたという。どうも最近まで幻想郷にはない種類だったため、一気に繁殖が進んだのではないかということだった。

蓮子さん曰く、生命力や活動力で勝る外来種が在来の種を駆逐してしまうということは、外の世界でもたびたび問題になっているらしい。

容疑者は魔法の研究だと言い張つたものの、畑を台無しにしたことが帳消しになるわけもなく。神様直々のお説教は避けられなかったようだ。

……もつとも、後にこの芝生茸の成分が麦の成長を助けることがわかり、結果的に怪我の功名となつて、最終的には畑への被害は不問に処されたという。

かくして秋の終わりのミステリーサークル事件は一件落着と相成つた。

芝生茸のクッキーは、ほんのりと甘く香ばしく、紅茶によく合つたことを最後に記しておく。

▼ 華胥^{かしよ}の国にて夢に餓え

よく晴れた穏やかな午後。高く澄んだ青空の下、我々秘封俱楽部はいつものように、幻想郷は稗田邸を訪問していた。

「こんにちは阿求ちゃん」

「お邪魔しますー」

「おや」

筆を鼻下に挟み、腕組みをして難しい顔をして文机に向かっていた阿求ちゃんがふと顔を上げる。

「お仕事申中だった？ なんかいつもごめんね。連絡もしなくてさー」

「いえ。今日明日にしなければならぬことというわけでもありませんし。一息入れることにしましょう」

幻想郷への日帰り旅行が日常になつてはや三ヶ月。このやり取りもいまやすっかり馴染んだもの。

メリーの眼を通じての移動が時間のずれを挟むため、私達の来訪が唐突なのは仕方のないことなのだが——まあ、最近はいづ問題なくこちらに来ることができるようになった。

「あ、これお土産。合成品だけど」

「いえいえ。洋風の甘味は大歓迎ですよ」

ドライアイス入りのケーキの箱を掲げてみせると、阿求ちゃんはやったー、という笑顔を覗かせる。

普段は落ち着いた物腰の彼女でも、ふとした時に見せる年相応の反応はやつぱり微笑ましいというか、可愛いなあと思う私でありました。

机の上を片付け始めた阿求ちゃんは、手元のベルをりと鳴らす。すぐにやってきたメイドさん——いや、女中さんか——が、さっそくお茶の用意に走っていった。

「早速いただくとしましよう。紅茶でも用意させます。丁度いい葉が入ったところでした」

「お構いなく。阿求ちゃんに会えるだけで十分よ」

ほどなく机の上には洒落たティーセットと銀のフォークとお茶の準備が整い、私達はそろつてお茶の時間を楽しむこととなった。

「ん……やつぱり天然の茶葉は違うわねえ」

淹れたての紅茶の香りをうつとりと楽しむメリーさん。

「成分的には合成品も同じだつて言うけど、とてもそうは思えないわ。そもそも新茶道じや紅茶なんて飲めないしね」

「私にはこのケーキに牛乳も小麦も、苺すら使っていないという方がよほど信じられませんが」

はむりとショートケーキの一切れを口に運び、阿求ちゃん。

科学世紀の時代を掲げて以来、多くの人が口にする食物のほ

とんどは合成品だ。天然ものが皆無と言うわけでもないが、多くは嗜好品と位置づけられている。実際に生まれてから合成品しか口にすることがないという人も珍しくはなく、天然ものの食材の強すぎる土や血の味を受け付けない人も多い。

前世紀をはるか昔の出来事とした私達の世代では、多くの人々が食物連鎖からも抜け出し、生まれてから一度も他の生命を口にせず生きているのだ。

「食事は本来、輪廻と同様に生命の繋がりで。生物は自分の命のために他の命を食べることで業を負うものですが——お話を聞く限り、それから解放されたはずの世のほうが、なにやら却って罪深いような気がしますよ」

「閻魔様と顔馴染みの人から聞くと重いセリフよね」

自然は人の手には及ばないものという常識はかつてのものだ。現実はいよいよヴァーチャルとの境目をなくし、自然と作り物の区別も曖昧になるばかり。

そうして人工物が自然を駆逐するたびに私は思うのだ。そもそも人間っていうのは、考える輩なんてヤワで繊細なイキモノではないんじゃないか、と。

私達が過ぎ去った時代の残る幻想郷に惹かれる理由のひとつも、そんなところにあるのかもしれない。

「まあ、お茶にお菓子美味しければ乙女としては結構どっちでもいいことなんだけども」

「ふふ。違いありませんね」

もつとも、こうしてくすぐすとこぼれる笑みが、恐らくは一番の理由なのだろうけど。

「ふわあ……」

しばらく他愛ないお喋りが続いた後、私は込み上げてきた欠伸に背を伸ばした。目元に浮かんだ涙をぬぐい、小さく頭を振る。

「お疲れのようですね？」

「んー。昨日徹夜でレポート終わらせたからね……一応仮眠は取ったんだけど、なんか夢見悪くて。元気健康が健全なサークル活動の第一歩なのに」

「あら。蓮子が夢を見るなんて珍しいわね」

「人を人形みたいに言わないで欲しいわ。……あふ」

「講義中に寝たりするからよ」

「……起きてたわよ9割くらいは。メリーだって普段から半分眠ってるみたいなものじゃない。私と話してる時だって、ホントに目が覚めてるかも怪しいし」

「ひどーい。私そんなに寝惚けたりしないわよ？」

「そうかなあ。この前パジャマのままキャンパス歩いてたのは覚えてないの？」

「え、何その話っ!!」

もちろん冗談なのだが、慌てるメリーが可愛いのでネタばら

しは黙っておくことにする。

「夢見が悪いなら、いい薬があるそうですよ。」

そう言うと、阿求ちゃんは赤と黒の錠剤が詰まった瓶を取り出した。良い夢を見ることができるといって触れ込みで兎の薬屋さんが置いていったという、胡蝶夢丸というものらしい。

「どうです？ 試しにお一つ」

「……ん。気持ちはありがたいけど遠慮しくわ」

効能が本物ならさぞ価値のあるものかもしれないが、生憎とそれは私の主義じゃないのだ。

「夢見は良くても悪くてもダメなのよ。夢って、睡眠中に脳が記憶を整理するときの作用なんだから。覚えてること自体が脳が休まってる証拠なんだし」

乱暴に言ってしまうえば、夢は脳のデフラグ中に見えるノイズのようなものだ。

だから基本、夢には自分の知り得ないこと、理解の及ぶものではないものは出現しない。多く、過去の記憶や体験——それがリアルであるかフィクションであるかは置いておいて——の入り混じったものとなる。

絡み合う蛇の夢を見てベンゼン環を見つけた話や、悪夢から吸血鬼を生み出した話など、夢が生んだ着想という話も枚挙に暇がない。——が、私にはあまりそれが良いこととは思えなかった。

夢日記は続け過ぎると気が触れるともいう。実際の体験ではないことを現実と取り違え、本当に起きたことを見失ってしまうからだ。

そんな事をとりとめもなく話していると、阿求ちゃん、ふむ、どこか面白そうな顔をして、

「では、今日はまさに絶妙の機会だったかもしれませんね」

「なにが？」

「これから人と会う約束があつたんですが、これで蓮子さんの悩みも解決できるかもしれませんよ？」

「……どういふこと？」

意味が分からず首を捻っていると、襖の向こうから、お客様ですと声が掛かる。

「いえいえ。すぐにわかります。丁度いい具合に見えたようですよ。……お通ししてください」

阿求ちゃんはそう言って微笑んだのだった。



お客さんというのは、慧音さんだった。

上白沢慧音さんと私達は寺子屋の先生役を引き受けた時に知

り合った仲だ。折り目正しい正座で、ぴしっと背中を伸ばして座る彼女に、思わずこちらも背筋が伸びる。

「貴方達も来ていたとは思わなかったよ。無作法で申し訳ない。稗田も先客がいるなら、そうと知らせてくれていれば手ぶらでなど来なかったのに」

「ふふ。折角ですから、お一人にも見て頂こうかと思ひまして」
いまい話が見えないままに、顔を見合わせるメリーと私に、慧音さんは改めて向き直り、深く頭を下げる。

「ともあれ、先日は色々世話になった。改めてお礼には何うつもりだが、この通りだ」

「そんな。こちらこそ邪魔しちゃったみたいで」

「いやいや。あれはなかなか子供たちにも好評だったんだぞ？もし良ければ今後も続けて欲しいという声もあったくらいだ」

「あら。蓮子、大人気じゃない」

「……先生なんて柄じゃないわよ」

幻想郷ではあまり数学や物理といった学問では盛んではないらしく、不得手だと言う慧音さんに代わって教卓に立つことになったのである。

半分は社交辞令なのだと思うことにするが、こうまで持ち上げられると何ともむず痒い。

「さて、それじゃあ慧音先生」

「ああ」

慧音さんは、脇にあった小さな藤の籠を机に置いた。

「これ？ 面白いのって」

「ええ」

阿求ちゃんに促され、何事かと見れば。

籠は小さくもぞもぞと動き、布でくるまれた中身がちよこんと顔をのぞかせた。

「わ、可愛いっ」

メリーがばあつと顔を輝かせる。

白と黒の身体に、ユーモラスに伸びた鼻。つぶらな目をこちらへと向けるその生き物は――

「これって……」

「獏ばくですよ。つい最近、里に下りてきたのを捕まえましたね。これまでは滅多に見られなかったんですが――」

阿求ちゃんも傍らの書簡の中から一冊を引き抜いた。そこには目の前の生き物と同じ絵姿が記されている。

「おお。北斎画だな」

ふむ、と慧音さんは頷き、指を一本立てて、

「白楽天は『白氏文集』の「獏屏 賛並序」に曰く。

『獏者 象鼻犀目 牛尾虎足 生南方山谷中

寢其皮辟瘟 圖其形辟邪』。

「獏というものの、鼻は象、目は犀であり、牛の尾と虎の足をもち、南方の山谷に生息する獣である。その毛皮は湿気を跳ね

除け、その姿は邪気を払う」

いかにも先生然としている雰囲気の慧音さんだったが、そんな古典の一節がすらすらと出てくるところを見るに、やはりその見識は相当なものだ。流石はハクタクの面目躍如と言うことなのだろう。

「手足が虎で尾は牛——まるで鵄ですね」

「それも近いな。秦^シ国などでは獏は积尊の乗騎としても有名だが、そこでは獏はさまざまな動物を作った時に余った材料から作られた生き物だともされている。そのために『混^マぜ物』などと呼ぶこともあるらしいな」

「へえ……」

獏の赤ちゃんは恐れる様子もなく、メリーの指先に、目を細めて顔を擦りつける。人懐こくどこかのほほんとした表情は実に愛嬌があつて、なんとなくメリーの雰囲気にも似ているような気がする。

「獏は麒麟や獅子と同じく、空想上の幻獣と同じ名前を持つ実在の動物が居るのだが、そのふたつが良く似ているという稀有な例だ。

いわゆる霊獣の麒麟や獅子は、同名の動物とは大きく異なるが、獏の場合はどちらかと言うとまず実在の動物が先にあつて、そこから後から邪気を払うという属性が付加され、霊獣となったのかもしれない」

慧音さんはそう言うのと、ティーカップに薄く口を付けた。

「……この邪気を払う、という性質がさらに時代を下るにつれて魔除けとして扱われるようになった。江戸の中期にはすでに悪夢を払うための霊獣として、広く版画や絵姿として親しまれていたようだ。麒麟や鳳凰などの四瑞獣に並ぶほどに信仰を集めていた記録もある。

他にも、伯刺^{ブラジ}西爾などは妖精を乗せ虹の橋を渡る霊獣だとされているらしい」

「ああ、それ聞いたことあるかも」

愛嬌のある獏の顔は、人の嫌なものを飲み込んでくれるという性質がぴったりに思えた。

獏が夢を食べてくれるということから、枕の下に獏の絵を入れるなんて風習があるのだとか。

「——『みし夢をばくの餌食となすからは、心も晴れしあけぼのの空』。悪夢払いのおまじないですね」

「じゃあこの子も、夢を食べてくれるの？」

「いい質問だ」

メリーの質問に、慧音さんは満面の笑顔。すっかり先生の顔になって、慧音さんは懐から小さな包みを取り出した。ちゃらり、と包みの中のものを手に乗せて、獏の鼻先にそっと差し出す。

慧音さんの手の上、鈍く光る黒い塊に、ふんふんと鼻を鳴ら

して。小さな獣はそのままそれに齧り付いた。

「……えーと。それ、なに？」

「鏃だよ」

「鏃って……矢の？」

「ああ」

予想外の答えに呆気にとられる私達をよそに、獺の赤ちゃんは、ぱりぱりと小気味いい音を立てながら、矢を平らげてゆく。

「先程の「獺屏 賛並序」において『按山海經 此獸食鐵與銅 不是他物』とあつてな。山海經——これは大陸古代の伝奇的地理書の中でも最も有名な書物のひとつだが——これはその引用のくだりだ。これによれば獺とは鉄を食い、それ以外のものを食べることはないとされている。

これはどうやら同じ白黒の動物である大熊貓と混同されているらしい。『爾雅』——これは大陸最古の類語・語釈辞典だが、その積獸の項目の中に既に『獺』の名を見つげることができる。

……もつともこれは単に名前があるというだけだが、爾雅の解説本である晋・宋代の『爾雅注疏』卷十一 積獸第十八には『獺』について『注似熊 黑白駁七 能舐食銅鐵及竹骨』と記述があるんだな。

“ 獺は熊に似ており、白黒まだらの身体を持ち、銅や鉄、竹を食べる ”——と、まあこう記されているわけだ。私も驚いたのだが、事実こうしてこの子は鏃を好む。

……実のところ、ここで言われている銅鉄と言うのは『箭』つまり弓矢のことだ。もともと古くの弓矢は竹（笹）で作られており、これを食べる動物として同じ白黒の動物である大熊貓がいた。そこから矢を食べる動物と言う話ができ、後に金属加工技術が進んで矢が鉄で作られるようになって、矢を食べるという性質は変わらず伝えられた。

そこから転じて鉄を食うものが獺である、となったのだろう。これも妖怪の生まれ方の一端を示しているのかもしれないな。

少し話は逸れるが、大権現を祀る野州の東照宮には、七十を超える数の獺の彫刻が居てな。これは魔払いの靈獸であるとともに、『鉄の武器を喰らう』という獺の性質をもつて、軍備の縮小と泰平の世が長く続く事を願っているともされているのさ。つまり、ここから言えることはだ——」

「……慧音先生。」

「ん？ あ、……すまない」

半目になった阿求ちゃんに釘を刺され、慧音さんはこほんと顔を赤くして咳払いを一つ。いつの間にかうつらうつらとしていたメリーと私は慌てて姿勢を正す。

「あー……ん。いかなな、つい熱が入ってしまった。所構わず講義を始める癖は直せと良く言われているのだが、どうもこればかりは性分だね」

照れ笑いと共に言う慧音さんが、さっきの様子では放つて

おけば一日でも二日でも話し続けていそうである。

……なんというか。彼女の授業を受けている子供たちというのは大変だろうなあと、他人事のように思う。

「——んんっ。夢を食うという性質についてだったな。広く獺は墓を鎮護する靈獣であるとされる。先程も少し触れたが、『大典祠部中職』等に見られるように、大陸では本邦よりもずっと古く、唐代には既に魔除けのための姿絵などに使われていたらしい。

これがどうして悪夢を食うのかという話になるが、もともと獺の邪気を払うという性質が、海を渡ってくる関係で他の妖怪と混同されて広まったもののようにだ。『酎中清話』などで推測されているが、夢を食べる莫奇^{バクキ}なる神との混同があるのではないかという説が有力だな」

「ふえー……。さすが慧音先生、詳しいのね」

「……いやなに、白澤と獺は親戚のようなものだからな」

「魚心あれば水心ですかねえ」

阿求ちゃんの補足によれば、獺王像などいくつかの例で、魔除けとして祀られる獺は人面牛身虎尾で額と腹の両側に各三個ずつ、計九個の眼をもち、白澤の特徴を備えているのだという。確かに言われてみれば、人を守る鎮護の靈獣として、獺とハクタクには共通点も多い。

「案外、この子も慧音先生のお子さんだったということはあ

りませんか？」

「な、何を言い出すんだっ!? わ、私はその、そんな……」

「冗談ですよ。慧音先生にはもう大事な方がいらっしやいますものね？」

「ひ、稗田、からかうんじゃないっ」

「あら、こちらは本当のことですよ？」

「っ……………」

悪戯めいた表情で笑う阿求ちゃんに、慧音さんは顔を赤くしつつ口を噤んでしまう。

微笑ましい光景を見つつ、私はふと疑問を口にした。

「ねえ阿求ちゃん、さっきちよつと気になったんだけど。今まで幻想郷に獺っていないかったの？」

「…………ええ。そのようです。記憶には少々自信はありますが、伝承などに名前を見ることはできても、実際に獺が確認されたことはないはずですね」

「なんで今になって見つかるようになったのかしら？」

「ん……………」

答えに詰まった二人に代わって、口を開いたのは獺を撫でいたメリーだった。

「そうねえ、多分……夢と現実が同一視されるようになったからじゃないかしら」

そう。良く出来たヴァーチャルは、現実と等価である。いま

や夢と現の境は取り払われ、魂と霊脈、意識の奥へと領分を広げた科学は、ひとの夢も侵略し始めている。

それはメリーの持論であつたし、私達の社会の主流でもある。

「……成る程。胡蝶の夢か」

慧音さんはそつと顎に手を当てて、

「歴史というものが広く人口に膾炙^{かいしや}し、伝えられる広義的な過去の共通認識であるとするなら、夢は共有化されない個人の記憶だ。

人に喋らずに抱え込むことで、夢は正夢となるという話もある。それは他者からの干渉を受けないためのまじないなのだろうな」

夢は太古の昔から、あくまでも個人のものだつた。眠っている時に見る夢も、起きている時に見る夢も、突き詰めれば自身から生まれ、自己に帰結するものだ。

とすれば、多くの夢を現実として共有するようになった時代に、もう悪夢を食べてくれる獏は不要のものであるのだということなのかもしれない。

「然るに、外の世界では夢のない者が増えているということではないだろうか」

「……夢もキボーもありやしないわね」

やるせない感想と共に肩をすくめてみる。慧音さんも重々しく頷いて、

「先程の『獏屏 賛並序』には、人間たちが戦争で武器に鉄を使い、死者を弔う仏像を作るために銅を使つてしまったため、獏が食べるものを失つてしまい非常に困っているという一節もあつてな。

これは森林伐採による野生動物の被害を示しているとも取れなくもないわけだが——」

食べる夢を失くした獏は、かくして夢を追い求め幻想郷へとやつてきた。そんなことなのかもしれない。

「つまり、夢を食べる一番の怪物は人間だつてことね」

「オチにしても酷い話だな」

なんとも締まりのない話だが、多分そういうことなのだろう。籠の中で獏の赤ちゃんは、まだぼりぼりと鏝の切れ端を齧っていた。

(丁)

(参考文献)

「中国古文獻中のパンダ」

荒木達雄

東京大学中国語中国文学研究室紀要 第9号 2006. 4. pp. 1-22

<http://hdl.handle.net/2261/6584>

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。
銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。
ます。

この本、『幻想科学ティータイム』は、秘封倶楽部の二人と稗田阿求の幻想郷での日常を描いた、当サークル十二冊目のSS本となります。

当たり前のように幻想郷に出入りする蓮子とメリーという、原作設定方ン無視で、近未来が舞台の秘封倶楽部の雰囲気は好まれる方からはお叱りを受けそうな内容になっていますことをお詫びします。

言い訳めいたことを述べていただきますと、そもそもは秘封倶楽部の二人がのほほんとして幻想郷に馴染んでいる光景が見たいと思ったのがきっかけでした。

その結果生まれたのが冒頭の阿求と一緒に炬燵で蜜柑を食べている二人であり、ケーキの箱を持って『こんにちわ』とやってくる二人だった、というわけでした。

拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

作中での阿求や里の描写は『久幸繻文』様の阿求日記の設定を参考にさせていただきました。花屋の娘、月月麟の設定はさらに遡ってチエキ空さんの提唱されているものとなります。

また、表紙・裏表紙の3人の顔アイコンは、『こんなんでもいいんすか』(<http://kingnsan.blog.fc2.com/>)の金銀様作成のものを使用させていただきました。使用に際し快く許諾をいただきましたこと、感謝いたします。

— それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「幻想科学ティータイム」

初版 平成22年11月28日 境界から視えた外界
第2版 平成23年2月20日 科学世紀のカフェテラス

発行 折葉坂三番地 (<http://oruhazakablog28.fc2.com/>)
著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」の二次創作です。





宇佐見 蓮子

私は思うのだ。そもそも人間っていうのは、考える葦なんてヤワで繊細なイキモノではないんじゃないか、と。



マエリベリー・ハーン

それとも、私と貴女の眼を取り替えてみる？
案外、似たような景色が見えてるだけかもしれないけどね。



稗 田 阿 求

要するに、彼女達は与太話を肴に集まる根っからの暇人である。
……だからこうして、私がお茶のついでに付き合っただけというの
悪いことではないのだろう。うん。